

3. 意見交換会、報告会の実施結果（議事概要）

庁内担当者との意見交換会（第1回）
議事概要

日時：平成19年10月22日（木） 15:00~17:15
場所：木曾町役場 本庁舎第1会議室

出席者

- | | | | |
|----------------------|----|-----|--|
| 1. 木曾町 | | | |
| 木曾町長 | 田中 | 勝巳 | |
| 木曾福島支所長 | 古幡 | 勝彦 | |
| 開田支所長 | 中村 | 保広 | |
| 議会事務局長 | 藤原 | 満芳 | |
| 会計課長 | 古瀬 | 敏幸 | |
| 住民環境課長 | 大畑 | 哲也 | |
| 税務課長 | 原 | 健 | |
| 資産税係長 | 小林 | 昌治 | |
| 総務課長 | 重盛 | 秀幸 | |
| 総務課長補佐 兼 財政係長 | 正澤 | 隆 | |
| 上下水道課長 | 三並 | 俊晴 | |
| 上下水道係長 | 中島 | 章 | |
| 保健福祉課長 | 山田 | 誠吾 | |
| 保健福祉課長補佐 | 生駒 | 純一 | |
| 教育委員会次長 | 倉本 | 市雄 | |
| 教育委員会生涯学習係長 | 木村 | 恭一 | |
| 企画調整課長 | 邑上 | 豊美 | |
| 政策企画係長 | 斉藤 | 政美 | |
| 政策企画係 | 奥牧 | 達也 | |
| 観光商工課長 | 原 | 隆 | |
| 観光商工係長 | 中村 | 隆 | |
| まちづくり推進係長 | 古畑 | 浩二 | |
| まちづくり推進係 | 柿崎 | 孝幸 | |
| 2. 委員 | | | |
| 株式会社都市総合計画 代表取締役 | 司波 | 寛 | |
| 株式会社ラック計画研究所 取締役 | 熊谷 | 圭介 | |
| 3. 経済産業省 | | | |
| 関東経済産業局産業部流通・サービス産業課 | | | |
| 商業振興室室長補佐 | 渡辺 | 理香 | |
| 中心市街地活性化専門官 | 茂木 | 千奈津 | |
| 4. 事務局 | | | |
| みずほ情報総研株式会社 | 篠田 | 淳二 | |
| 〃 | 金澤 | 雅樹 | |

配布資料

議事次第

座席図

出席者名簿

資料1 総合計画施策大綱

資料2 診断・助言事業の概要

資料3 現況把握シート

資料4 中心市街地活性化基本計画策定に向けて

参考資料1 改正中心市街地活性化法概要について

参考資料2 中心市街地来街者、郊外型大型店来店者アンケート結果

参考資料3 木曾町のプロフィールデータ

司波委員提供資料（3法改正後の中心市街地活性化の方向）

議事概要

1. 開会

資料確認

町長あいさつ

- ・国の診断・助言事業に応募し、採択され、今日は第1回目の会議ということで各課にお集まりいただいた。中心市街地の事業を総括しながら新しい時代に合わせた形にするための見直しの出発になると考える。
- ・これまで中心市街地を町民と一緒に進めてきて、ハード事業は整備されてきている。ソフト事業も町民の活動はTMOとして先進的な活動が生まれてきたと思う。行政だけがまちづくりをすることを心配していたが、町民全体の動きとなってきた。しかし、やはり一部のやる気のある参加者に留まり、町全体の動きとはなっていないという問題はあった。
- ・また、4町村の合併がこの間あったことから、議会答弁では、中心市街地を総括して、今後のあり方を考えた方が良いのではという発言をしている。その中で、今回の事業に採択されており、今日は出席の皆さんから様々な立場から意見を発言していただき、木曾町全体の発展、活性化に繋がるような方向性を議論していきたい。委員、国の担当者からもアドバイスを得たいと思う。

出席者紹介

（司波委員）

- ・これまで診断助言事業でいろいろな都市を担当してきたが、木曾町のような小さい町は初めて。随分活性化しているという印象を持っている。もう一度評価して、次へどうするかのお手伝いできればと思う。

（熊谷委員）

- ・都市地域の観光、景観というテーマを専門としている。上の段にも観光客がたくさんきており、変化に飛んだ歴史ある町という印象。町の魅力を感じている。

2. 総合計画策定状況【資料1】（木曾町）

- ・総合計画は今年26日に審議会がある。あと2回あり、12月に答申を出すというスケジュール。
- ・「みんなで進めるまちづくり」の1つに「5.コンパクトなまちづくり」を追加させていただいている。理由は、平成20年度の策定を目指している中心市街地活性化基本計画を木曾町全体のものとして位置づけて行きたいからである。人口減、少子高齢化の社会構造の転換をむかえ、コンパクトで効率の良いまちづくりを推進するということである。
- ・都市計画の見直し、集合住宅の建設、商店街の見直し等、また今後施設の建設も予定される。これらを総合計画に盛り込んで行きたい。その下部の計画として動けるものとして基本計画の策定をお願いしたい。

3. 診断助言事業の概要【資料2】(事務局)

4. 中心市街地活性化基本計画の状況【委員提供資料、参考資料1】(司波委員)

- ・用意した資料は、なぜ今、法改正されたか、新しい計画はどう考えたらよいかをまとめたものである。中心市街地は担当課だけでは到底進められるものではなく、従来の町の構造をまだ活力の残る今のうちに考え直そうということで、考え方が大分変わってきている。(以下、考え方の変化として、3点のポイントについて説明。「商業の再生による中心市街地の活性化」から「中心市街地の総合的な活性化」へ、高齢化の進展と省エネ時代に対応した都市構造へ、多様な都市生活への対応)
- ・旧計画は700弱あったが、木曽町は大変な成功をした珍しい事例。基本計画の骨格構造も変わっているが、成功事例として評価して、新しい計画を作っていく必要がある。(以下、骨格構造として5点のポイントについて説明。公共・民間投資の公害拡散の抑制、中心市街地総体としての活性化、街なか住宅導入の重視、公民協力体制の確立、総理大臣の認定制度の導入)
- ・現在18の都市で認定を受けている。小さい市では久慈市や豊後高田市。豊後高田では古い町を保全して町を活性化し、市民の中心部として使えるようにしている。木曽町と同様の条件であり、先行している事例。それぞれ特色のある18都市である。内閣府の担当によれば、他に約40都市が認定に向けて準備中である。新計画はおそらく100ぐらいではないかと思われる。商業、産業だけの視点ではなくて、将来的に便利で使いやすい場所を作っていくという考え方である。

5. 中心市街地の現況報告【資料3】(木曽町) 中心市街地来街者等アンケート調査結果【参考資料2】(事務局) 基本計画策定に向けて【資料4】(木曽町)

6. 意見交換等 (木曽町)

- ・コンパクトシティ論については、正直これで良いのかどうか、胸のつかえがある。中心市街地活性化をするために、町の真ん中に住むことが大事だということで、大手町に集合住宅を作ったらよいのではという発言をしたこともある。しかし今中心に人を集めれば郊外はもっと衰退してしまうのではないかと。木曽町に限界集落が3つあるというが、私の集落も子供がいない。あと何年か経ったらどうなるか。結局都市部に人を集めて、山村の人口を減らす、国作りがこれでよいのかという疑問である。コンパクトなまちづくりは内向きのまちづくりになっては駄目だと考える。木曽の地場産業を発展するようにしなければ、中心市街地のまちづくりもない。
- ・「コンパクトなまちづくり」とは何か、ここを議論しなければ前に進めないと思う。商工観光課で検討してきたので、意見を聞きたい。
(木曽町)
- ・確かに国の施策のままで当町に合っているかは疑問が残るところもある。中心市街地活性化は都市部の

大きな都市に合うような考え方がある。これまで5年間でも国交省の大きな事業は使うことができなかった。経産省のリノベーション補助金も県との考え方の違いでできなかった。街なみ景観整備事業を活用して、景観の方から事業を進めてきた。

- ・合併による施設整備の議論は出てくるし、これまで中活を作ってきたので、補助金ありきではないが、計画があれば有利にはなる。また全てを中心に集めるということではなく、土地の活用方法を考えたいということである。49haのエリアの見直しについても、拡大も視野に入るのではないかと考える。
- ・街なか居住については、青森市では郊外の戸建を市営住宅で借り上げ、高齢者に街なかに住んでもらい、ファミリー世帯に戸建に住んでもらうということも行っている。中心を枠として、公共交通も含めて周りの役割を再構築したいという考えである。
(司波委員)
- ・町長の悩みは木曽町だけではなく、日本全国の話である。大都市部でも高齢者が便利な駅の近くに住み替えるという動きが出てきている。一方で不便な郊外にスラム街ができてきた。これについて手当がない。同じことが木曽町や地方でもおきている。
- ・一昨年度、診断助言事業で担当したある市も合併市で、市の人口が10万から9万になるといときに、どこにどのような形で住んでもらうかを議論した。担当の商工課長は、周辺の限界集落のことを考えると「街なか居住」としての看板は挙げられないということだった。しかし、市長が政策の問題だということで、皆が散らばって住んだら生活の頼りをどこにすればよいのか、街なか居住を前面に出すことは出来ないが、将来のことを考えておかなければならないという話があり、街なか居住を推進していくということとなった。更には、周辺部、山間部に対する手当は何もないので全国運動にしていかなければならないという話もあった。
- ・総合計画での「コンパクトなまちづくり」は、自治体としては中心と周辺の両方の手当が必要である。これは、皆さんで知恵を出して、車の両輪で進めていく必要がある。周辺部の土地利用についてもコンパクトな土地利用を守って、環境を守る視点が大切である。周辺を見捨ててのコンパクト論はやめていただき、併せて周辺をどうするのかという議論が必要である。そのため担当の商工観光課には重すぎる課題であり、全庁で取り組む問題である。
(熊谷委員)
- ・大変重い問題だと思う。農業と林業にも関わってくる。飯山市の仕事をしているが、豪雪で市域も広く、集落が分散している。新幹線のまちづくりとエコツーリズムということで農山村集落もコンパクトにまとめて適正配置が必要ということである。さらに公共施設、病院もどう配置していくのかという議論も必要である。街なか居住だけではなく、いろいろなコンパクトへの取組み方があると思う。
(事務局)
- ・先ほど町長から内向きのコンパクトシティの議論をしてはならないという話だったが、木曽町の中心市街地は観光客を外から呼び込んでいる。街なかを中心とした観光産業が発展することで、町民経済も豊かになるという視点もあると思う。

(熊谷委員)

- ・データには現れていないが、景観整備によって、おそらく観光客は増えていて、それをいかに経済効果に繋げていくかだと思う。しかし、経済だけではなく社会的心理的効果もあり、地域の人誇りに思う町になることが重要である。
- ・産業として、漆や木材もあるし、開田高原の観光地もある。街なかにもものづくりの拠点があって、観光と絡んだり、農業や林業地代が街中の食材の提供によって賄えるというような、観光と消費が絡んでくる動きがあればよい。
- ・街なかの産業が複合的な産業になっていくことが必要だと思う。観光客が多くなると俗化してしまう傾向があるのだが、そうではなくて、その地域の文化と産業が一体となったものがいい。

(司波委員)

- ・海外の例では、イタリアのシシリア島は、日本の沖縄のような戦争があったところだが、復興の鍵を都市観光とした。街を見せて、食をサービスして再生していくということで観光がものすごい産業となっている。農村部から豊かな食材の提供を受け、都市内だけではなく農村部も所得が高い。このようにうまく仕組みを作れば、周辺の農業にも影響してくる。超長期的には、街が美しく、サービスがあり、また、ものづくりもしっかりしているということは、イタリアの街のように観光が立派な産業になるということである。
- ・しかし、そうは言っても、今どうするかということがあるので、周辺部も生きていく形を総合計画に位置づけて進めて欲しいと思う。

(木曾町)

- ・いい町は農業の保護政策があると思う。コンパクトシティを作るといっても、産業の発展を考えないと町全体がコンパクトになって、無くなってしまうのではと考えてしまう。
- ・少子高齢化に向けてどのように住みやすい町を作るか。都市部だけではなく、山村でも暮らしていけるかである。
- ・商店街の平均年齢が50歳ということに驚いている。高齢化はものすごい勢いであり、このままではコンパクトなまちづくりでも持たないのではないかと。皆で立ち上がって魅力ある町をどう作っていくか。総合計画と中心市街地の基本計画を併せて、あなた方の町の未来としてどういう町を作るのか、議論して欲しいと思う。

(司波委員)

- ・協議会準備会を立ち上げる予定となっているが、資料を拝見すると商店街の方が中心であり、このままではお手盛り計画しかできない。是非、周辺の集落の方も入ってもらい、どうせ作るならこのような街がいい、という意見を吸い上げる仕掛けが必要である。それを裏返せば集落居住者が求める中心市街地の姿を考慮した施策にしていくこともできるのではないかと。

(事務局)

- ・今日は大変幅広い部署の方にたくさん集まっていた。折角の機会なので中心市街地に対する疑問や質問等をいただければと思う。

(木曾町)

- ・ヤゴラ地区の開発についてワークショップを行っていたが、中心市街地の計画を見直すとうなるのか。
- ・商業地の地価の動向については、県内で上昇率が高いのは軽井沢(17.2%上昇の34万円/m²)、逆に下がったのが白馬(8.7%下落、約3万円/m²)。木曾町では八沢が4.2%下落で5万6千円/m²である。街中は土地が高いという意見があるが、中心市街地の事業を行っても土地が値下がりしている。
- ・軽井沢は観光商業で、別荘もあり、ステータスもある。白馬も観光地だったが違いが出ている。観光商業は危険があるのではないかと。自分の身の丈で快適に過ごせる町が良い。

(木曾町)

- ・ヤゴラについては昨年WSを行い、上の段の計画は出来たのだが、商業のないところに商業が入って生き延びているが全体では落ち込んでいる。
- ・地区の生活観光施設という方向で進めているが、昨年は土地利用について、今年度は建物の活用について考え中である。本町地区を練り直していきたいと考えている。
- ・街並事業は5年残っているが、事業として今後どうするかは今後検討していきたい。

(熊谷委員)

- ・観光地は流行り廃りがある。外部資本が入ってくれば地価も上がる。俗化が進むと廃れるものであり、それをコントロールすることが必要である。
- ・食や漆の文化を育てていくことが、文化の振興の上でも重要だと思う。

(木曾町)

- ・由布院の方の話だが、朝ドラで由布院を舞台にすることに反対したという。我々が木曾義仲の大河ドラマをやってくれという動きとは反対であり、反省したものである。TVの効果は一時的で、本当の観光が育たない。由布院では入込が400万人あり、今後は由布院らしい町を壊さないことが大事だという話があった。
- ・木曾の観光とはどういうものをテーマに掲げておく必要がある。またそれに頼るだけではなく、産業に発展することが必要。この地域の産物をここで消費する。農業も絡んでくる。その中で、コンパクトなまちづくりを進めないとまずいと思う。

(司波委員)

- ・ドイツのフライブルグの郊外には小さな集落があり、ワイナリーがある。30代の後継者いる。ここのワインはこの町でしか売らないということであり、造る方にも哲学がある。そういう形での町と農村の結びつきもある。

(木曾町)

- ・今の基本計画も、商業だけではなく、政治、経済、社会、文化という柱を立てて、町の顔をしてやってきた。歴史を踏まえて安らげる町というやり方は間違っていないかと思う。そのため、この4つの機能を考えて、メンバーを集めてもらえばと思う。

(事務局)

- ・本日は、中心市街地のまちづくり、コンパクトなまちづくりということをテーマとしたが、結局は、町全体のまちづくりに繋がっており、幅広く大きな話が出来たと思う。

7. 閉会

(関東経産局)

- ・ 中心市街地の計画は、国の認定申請となるが、もちろんこれを選択しないまちづくりの方策もある。認定された計画は2万人から政令市までであり、県都レベルで作りやすい計画かもしれない。診断助言事業では外の方との議論もあると思うが、商業以外、NPOの方などいろいろな方の意見を反映して欲しいと考えている。

以上

中心市街地関係者との意見交換会(第2回) 議事概要

日時:平成19年12月17日(月) 19:00~21:00

場所:木曾町役場 福島支所

出席者

1. 中心市街地関係者

出席者名簿参照 約40名

2. 委員

株式会社都市総合計画代表 取締役 司波 寛

株式会社ラック計画研究所 取締役 熊谷 圭介

3. 事務局

みずほ情報総研株式会社 金澤 雅樹

配布資料

議事次第(本紙)

座席図

出席者名簿

資料1 診断・助言事業の概要

資料2 前回の意見交換会の内容

資料3 木曾町の中心市街地の現況(強みと弱み)

資料4 アンケート調査からみる木曾町中心市街地

資料5 旧計画事業一覧

参考資料1 木曾町中心市街地活性化の意義と目指す方向

参考資料2 中心市街地I/Aの人口とバスのルート

議事概要

1. 開会

資料確認

2. 意見交換

(事務局)

- ・ これまでの中心市街地の取り組みや効果について、住民の方、事業をされている方はどう評価されているか。例えば、まちづくり木曾福島の活動状況等はどうか。

(中心市街地関係者)

- ・ ボランティアが年寄りから若者まで100人おり、いろいろなチームで活動している。活動している方々の意識も高く、町民にも活動は目立っている。

(中心市街地関係者)

- ・ 街並み景観が進み、PRも進んで、ハトバスが来るなど、観光客が来たのは効果があったと思う。しかし、販売額や事業者数の数は深刻というデータを見て愕然としている。

- ・ 土産屋を経営しているが、商売は悪くなっている。観光客の増加が、購買力になっていない。本町に来

た観光客は駅には来ない。駅の乗客数も伸びていないと思う。

(熊谷委員)

- ・ 観光客はバスや自家用車の利用が多いのか。

(中心市街地関係者)

- ・ 駅から来る方は電車利用となるが、自分の土産屋の購買層は車利用が多い。特に帰省シーズンは車になる。

(中心市街地関係者)

- ・ 電気店を営んでいる。売上げは落ちていくばかり。顧客は高齢者だが、亡くなればその分、客が減る。息子にも継がせたくない現状である。

(司波委員)

- ・ 木曾町は他の地方都市とは異なり、地形の制約があるので郊外型の大型店が出店しなかった。まちの高齢化、人口減少がそのまま商業に響いている。逆に言えば、若い人が住んでくれれば、持ち直す可能性がある。中心市街地に通勤してくる人があるというのは大きいことだ。

- ・ 住んでいるという視点からの意見はどうだろうか。歩いてみて上の段は懐かしい風景になっていると思っている。単なる観光の取組みと思っているのか、皆さんの共有財産と思っているのか、本音を聞きたい。

(中心市街地関係者)

- ・ 一般の住民は関心ないと思っている。何とか良くなるかとやっているのだが、いまひとつ良く盛り上がりがないかなと思っている。

- ・ 商売を辞めていく状況で、シャッターを下ろす店が増えるという噂もある。

- ・ 借家が高いので、行政が中に入って安く借りられる仕組みが作れないか。安ければ出店したいという方はいるという。

(司波委員)

- ・ 県庁所在地でも状況は同じである。高い家賃を提示してきて、貸せなければ貸せなくても良いという。

(中心市街地関係者)

- ・ 知り合いから値切られて店を3万円で貸している。他の3件はポロ屋である。貸す側としては、物件が老朽化しており、修繕するだけの金がないこと、修繕に見合った家賃も取れないということがある。

(司波委員)

- ・ 300万円程度の内装改修を行政支援している例はある。貸す方、借りる方も助かる。空き店舗、空き家も増えてきている。外から通ってきている方は、いい借家があれば住むのではないか。ここは小さい町なのにまちで何でも揃うのですばらしいと思っている。

- ・ ある都市では、駅前のマンションが売れていない。コンビニも商店もなくなってしまい、都心に住むことが不便だという。

- ・ 木曾町は、現状は生活が困らなくなっている。これが最後の機会だと思って手当てをすべきだ。また、外から来ており、広い商圏を持っているということもポイント。これを活かしていく必要がある。名古屋都市圏の一宮市は、来街者の平均距離は3kmで近所からしか来ない。

(中心市街地関係者)

- ・ 明日の議会で限界集落について一般質問がある。限

界集落とは 65 歳以上が 50%以上という定義だが、中心市街地の区域の複数で既にそのような状況である。

(事務局)

・ボランティアが積極的という意見と、町民が無関心という意見があったが、活動しているのは特定の方か。ボランティアは木曽福島以外の町民もいるのか。

(中心市街地関係者)

・アンケート調査で、「まちづくり活動が積極的」という意見が全国より多くなっており、うれしく思っている。

(中心市街地関係者)

・ボランティアは、福島の方がほとんどであり、福島以外の方は少数である。花いっぱい運動やまちの案内人などのチームを作って活動している。
・関係者は良くやっているが、関係ないよという人もいるという意味である。

(熊谷委員)

・観光客の増加で渋滞が起こったり、生活の空間が阻害されたりという、観光公害のようなことはあるのか。

(中心市街地関係者)

・そこまでの状況にはない。3~4年前までは閑散としていた。上の段は人が増えている。

(中心市街地関係者)

・上の段には、商店は2箇所しかない。住民は意識的に応援しているのではないと思う。景観の協定での住民の関心は高い。イベントなどをもう少し行えればと思う。

(中心市街地関係者)

・外部の方に聞きたいのだが、今の上の段のポリシーで観光地としての魅力はあるのかどうか。

(熊谷委員)

・観光地や観光施設というよりも、近年は日常生活空間を含めて観光と捉えられる。周辺の路地や川沿いまでも観光の対象となっており、まち歩きできるようになっている。
・川があって立体的な町になっていることもすばらしく、ポテンシャルは高いと思う。

(司波委員)

・来訪者としての意見だが魅力がある。外見だけではなく、良い飲み屋があることや、町が立体的であることも理由である。上の段が拠点になっており、ここに美術館でもあればなお良いと思う。

・これに加え、音楽もうまく活かせられないだろうか。構造的に面白いと思う。しっかりと落ち着いた町であり、リピーターはある。

・さらに周りに観光資源があり、まちで接点がないか。例えば、スイスのマッターホルンのように、山登りに来た方が、まちでももう1泊出来るようになればよい。

・高齢化が進み、ガソリンが高くなれば車が使えない時代になると思っている。中心に住み、中心で仕事するような生活の仕方がある。観光バスや自家用車で来ても、まちを歩くもの。歩きやすさをどうするか。一つの道路から面的に広げていければよい。

(司波委員)

・旧福島町以外の人も町民になられた。外の方は、福

島の中心市街地は関係ないと思っているのだろうか。これからは周辺部の方の支持がなければ財政面も含めて支持されない。福島が良くなることが、周辺のためにもなるということを理解してもらう必要がある。

(中心市街地関係者)

・実家は旧三岳村だが、中心部は福島だという意識である。特急が停まる駅だし、異論を唱える人はいないと思う。

・周辺の地域の方が、松本や伊那に買い物に行っても、それらを自分のまちとは思わないだろう。

(司波委員)

・山形のある市の事例では、同じく合併市で、市外には郊外型の大型店があり、市内には限界集落もあるというところ。市長は周辺から人を中心部に積極的に呼び込む施策は打てないという話だった。そこに比べれば、木曽福島では周辺部にも支持されやすいと思う。

(事務局)

・アンケート調査で、「まちの顔と思う」という意見が全国よりも非常に高い。町外が31%であるという回答者であり、外の方も木曽福島を顔だと思っていることがわかる。

(熊谷委員)

・アンケートでは、公共交通の評価が低い。交通は中心市街地内の話と、中心と外とを結ぶものがあるが、先日、木曽福島のバスが良く進んだ事例として報道されていた。

(中心市街地関係者)

・循環バスだと思う。60歳や50歳は100%免許を持っている。バスに乗ったことがある人はこの中にもほとんどいないだろう。自分も乗ったことがない。
・多少高くついたとしてもバスではなく、車を利用するのではないか。感覚的にバスには乗らないものである。公共交通の整備が地域の活性化につながるのかが疑問である。

(司波委員)

・確かに東京であれば徒歩か電車である。田舎は難しいかもしれない。例えば富山市では高齢者が免許を返上すれば、公共交通の乗車補助金を出している。政策的に公共交通へ転換している。

(中心市街地関係者)

・周辺を直接つなぐバスがないので、観光客は不便だと思う。全部福島を通る。

(司波委員)

・放射状になるのは公共交通の宿命である。高齢者ばかりではなく、免許を取れない世代、高校生などには公共交通は必要となる。

(中心市街地関係者)

・権兵衛トンネルの効果で、奈良井に観光客が流れているという。カラー舗装などして整備しているが、木曽福島もそのようにするべきだろうか。

(司波委員)

・ヨーロッパの各都市では、車をまちに入れないまちづくりを進めている。しかし、まちに入りたいという意見もある。

・舗装を綺麗にすることから始め、だんだんと合意が出来てくると、歩くスペースが増えてくる。将来的には、木曽福島でも車が入らなくなってくれば良い

と思う。

(中心市街地関係者)

・足湯は、夏の期間など路上駐車により渋滞したら困る。駐車場を近くに作るべきではないか。

(司波委員)

・車はまとめてどこかに置いてもらうしかない。歩いてもらうまちづくりを進める必要がある。そこまでの歩道を整備し、歩いていくだけの価値のある足湯にすべき。まちの入り口を駐車場にするというものもある。

(中心市街地関係者)

・歩道も取れない状況である。一方通行にするというのはどうなのか。

(司波委員)

・一方通行ではスピードが出やすい。むしろ対面通行として、すれ違いのスペースを作る方がよい。これは町民が合意すれば警察も OK するものである。道路が狭いからといって道を広げれば、まちが壊れることになる。今ある道路でうまくやるべきだ。時間差にする、車道をジグザクにしてスピードを出しにくくするといった工夫がある。

(中心市街地関係者)

・足湯や観光は夏場が中心になる。

(司波委員)

・10月に訪問した際は、女性4名が夜ビールを飲んでいた。そのような使われ方もある。

(中心市街地関係者)

・商店が日曜に休んでいるのだが、観光地としてどうなのだろうか。

(熊谷委員)

・木曾福島は、奈良井や妻籠のような一般的な観光地ではない。地域の生活の中心地でもある町である。商売人も休む必要がある。

(司波委員)

・ドイツは労働者保護の観点から日曜日は休みである。しかしウィンドーショッピングで楽しんで、映画や食事をしてにぎわっている。

(事務局)

・今日は男性のみの出席となっているが、奥さんや子供たちは中心市街地をどう思っているのだろうか。

(司波委員)

・子供たちの移動が問題である。通学定期も負担で、高校生も親が送ることが多いだろう。いくらガソリンが高くなっても、家族全員で車に乗れば公共交通よりも安いのが実態。

(中心市街地関係者)

・自分が子供のときよりも車が多く、交通環境が悪くなっていると思う。通学路も交通量が多い。

・子供たちが遊びに出ているという光景はほとんどない。どこに行くのも親がかりである。

・高校生は循環バスに乗っているかと思えば、運賃が下がってもさほど変化がない。木曾福島の高校生はバイトをせず、金も持っていない。外から通学に来ている学生の方がバイトをする傾向にある。

(司波委員)

・東京でも上野の学生が新宿でバイトをするということは良くある。

(中心市街地関係者)

・中島は、県営住宅もあり、若い人が増えている。町の機能が中島の方に移ってきているという事実を町の方は認識があるのだろうか。中心が移ってきているのではないか。

(中心市街地関係者)

・中島地区には病院やコンビニがあり、非常に住みやすいと感じている。しかし、県営団地は別に考える必要があるだろう。高齢化しており、娘も借家が見つかりにくいという。旧中島区の中は問題があると思う。

(司波委員)

・中島地区は店が増えているのだろうか。

(中心市街地関係者)

・発展会としては、件数が減っている。しかし大きな減少はない。空き家はあるが、貸す気がない状況。

(中心市街地関係者)

・家財道具があるので貸しづらいという。

(司波委員)

・空き家は非常にもったいないと思う。うまい仕組みを作れないか。

(熊谷委員)

・仏壇も問題だという。

(中心市街地関係者)

・ある家も2階に仏壇があり、もって行くところがないという。

(司波委員)

・家具ごと貸すという文化はない。絶対に貸せないということではなく、条件さえあえばだと思う。

(事務局)

・本日はいろいろな意見が出た。さらに、年明けに、可能であれば木曾福島地区以外の方も交えた形で意見交換会を持ちたいと考えている。

以上

報告会(木曾町)『日本のふるさと木曾町を考える』
議事概要

日 時：平成 20 年 2 月 16 日(土) 14:00~17:00

場 所：木曾福島会館

出席者：約 100 名

1. パネルディスカッションパネラー

木曾町長 田中 勝己

木曾福島地域協議会会長 樋口 清

県立木曾病院医師 天谷 次郎

木曾商工会副会長 春日 正志

(株)まちづくり木曾福島代表取締役 重野 信孝

木曾町木曾福島地区民生児童委員協議会長 中邑恵美子

2. 司会進行

商工観光課長 原 隆

3. 委員

株式会社都市総合計画代表 取締役 司波 寛

株式会社ラック計画研究所 取締役 熊谷 圭介

4. 事務局

みずほ情報総研株式会社 金澤 雅樹

熊谷かな子

配布資料

中心市街地活性化に向けた取組み経過
市町村の中心市街地活性化の取組みに対する診断・助言事業（事務局）
木曾町中心市街地活性化の考え方（司波委員）
観光と生活が融合した木曾町らしいまちづくり（熊谷委員）
木曾町の意見交換会のまとめ（事務局）

議事概要

あいさつ（木曾町長 田中）

- ・本日のシンポジウム開催にあたり、大勢の皆様のご参加をいただき感謝する。
- ・旧木曾町の中心市街地活性化（商店街の活性化）は永年の課題であった。
- ・平成13年度に活性化計画を作成し、14年度に取り掛かり、15年度より本格的に事業に取りかかっているが、その間に町には様々な変化があった。
- ・過疎化が加速する中で、観光客を呼び込む町を作り、それを起爆剤に町の活性化を図ることを大きな戦略としてきた。
- ・権兵衛トンネルの開通による周辺環境の変化や、高齢化による中心商店街のシャッター化が目立ってきている。
- ・今回の診断・助言事業では、町として唯一、木曾町が選定された。
- ・これからのまちづくりは、町村民が主役でなければ成功しないと考えている。
- ・私達の意見を出し、みんなでまちづくりを考えていくことが、今後のまちづくりの一番大事な姿だと考えている。

第一部

診断助言事業開催経過（事務局）

診断・助言事業の目的と対象市町村

- ・平成18年に施行された改正中心市街地活性化法に基づき中心市街地活性化に取組む市町村に対し、新しい中心市街地活性化基本計画における基本的な考え方や事業を実施する地元での推進体制の在り方などについて、実態を踏まえた幅広い視点から診断・助言を行い、市町村自らが中心市街地活性化の今後の取組施策を作成、中心市街地活性化を具体的に推進していく一助としたもの。
 - ・今年度は20市町村を選定し、その中に木曾町が含まれている。
- 診断・助言事業実内容
- ・統計等の客観的なデータに基づいた中心市街地の現状の整理。中心市街への来街者と、郊外店舗の来店者にアンケートを実施。
 - ・また、地元のニーズに応じて意見交換会等を開催し、本日の報告会となっている。
- 中心市街地活性化のスキーム
- ・数値目標の設置や中心市街地活性化協議会の発足等がある。
 - ・これからの中心市街地活性化
 - ・旧計画は市街地の整備改善、商業の活性化がメインだったが、新計画には、都市福利施設の集積、まちなか居住の推進が含まれている。
 - ・人口減少、高齢化社会に向けた都市構造や、財政制

約時代の集中投資。また、まちなかの生活拠点の活性化・再生が必要となっている。

木曾町診断・助言事業の実施経過とテーマ

- ・事業では、2回の意見交換会と、アンケート調査を実施した。
- ・中心市街地の現状と課題について報告をいただくと共に、今後の診断・助言事業の方向性等の話し合いを踏まえ、本日の報告会に至った。
- ・テーマは、観光と生活が融合したコンパクトなまちづくりの推進を挙げ、全庁的体制で取組むための体制整備のための助言、協議会へ参画が想定されるメンバーを中心に、これまでの取組みを総括する、中心市街地活性化の意義、必要性について、特に旧3村住民を中心に理解を深めるよう対応する。
- ・これら3つの提案を基に診断・助言をさせていただいた。

中心市街地の現状

- ・人口：木曾町全体よりも減少が激しく、5年で10%減少。高齢化率は34.5%で3人に1人が高齢者。
 - ・商業：小売販売額：2年間で14億円の減少。空き店舗率：21件で14%。
 - ・事業所：3年間で63件・10.3%減少。従業員数：1,024人・22.1%減少だが、全町に対する事業所数シェアは、55.5%と高い。
- 来街者の特徴
- ・居住地域：市街地内、市街地外、他の市町村が同率。
 - ・来街目的：買い物が最も多いが、病院、金融機関、公共施設も多い。
 - ・自宅までの距離：20都市平均と比べると、遠方からの来街者が多い。
 - ・交通機関：自家用車が断トツ。徒歩、自転車、公共交通機関利用は少ない。
 - ・満足度(プラス評価)：歴史と文化がある。安全に暮らせる、等。
 - ・満足度(マイナス評価)：夜のにぎわいがある。レジャー施設が充実、等。
 - ・住みやすさ：住みやすいと思う割合は、平均より多い。

木曾町への診断・助言

- 「木曾町中心市街地活性化の考え方」(司波委員)
- ・木曾町は良い町であるが、衰退してきており、どうかしたいと考えている。活性化には皆さんの協力が必要である。
 - ・わが国で、今何が起きているか
 - ・街の置かれている背景として、人口減少が進み、放置しておけば隣が空き家になりまだらな街になる。
 - ・高齢化が進み、今まで以上に緊密な助け合いが必要になってきているのに、つきあいは薄くなってきている。助け合うシステム作りが必要である。
 - ・ガソリンも値上がりし、自由にクルマを使える時代は長続きしない。歩くことと公共交通が大切になってくる。
 - ・経済が生活感覚に占める割合が減少し、モノだけの追及は終わり、生活の質を求める時代になってきた。人と人との付き合いが大切である。
 - ・木曾町・今まではどうなっていたか
 - ・町村合併前から木曾福島は大きな役割、核となってきた。遠距離から人が来ている。
 - ・木曾町全域から見て生活の中心である。買物、医療、

- 生活利便施設、娯楽施設が集積し、満足できる。
- 働く場でもあり、朝、通勤で外から来る人が多くなっている。
- 地形の制約があり、放射状の道路は十分に整備されており、周辺同士は繋がりにくい、周辺と木曾福島との物理的なつながりはある。
- 特色ある地域であり、御嶽信仰と結びついている三岳、先駆的な農業の展開と新しいリゾート地開田、街場との近さを活かした新たな居住地となる日義がある。
- 木曾町・今どうなっているか
- 高齢化の進展と人口減少により空家、空室、空地が増加している。
- 地域内の買物中心であったのが、外へ外へと買物が流出し商店街の衰退を招いている。
- 木工業の衰退により働く場が減少している。
- 街並再生等により、観光客を誘致しているが、都市観光までは成長しきれていない。
- 周辺地域は特色があるが、高齢化により地域を支える力が衰退している。
- 流入する都市住民を地域力へつなぐ試みは行われているが不十分である。
- 今のまま自動車に頼った生活では危ない。
- 福島をどういう街にするか
- 今まで行政区画は狭かったが、合併により福島に住む人だけではなく、周辺の人にも頼りになる街となる必要がある。周辺の人々にどうやったら役立ててもらえるのか、このような姿勢が必要である。福島の活性化は周辺の人にも必要である。
- 人がまちに住むことは大事であり、人が住まないまちはまちではない。
- 新たな地場産業として都市観光の振興が必要である。
- 公共交通の充実を図り周辺部との連携を強化する必要がある。
- 歩いて楽しい街にする必要がある。歩いて楽しい街は人が歩いて楽しい雰囲気になれるかどうかである。ヨーロッパの古いまちは車を入れないでのまちづくりを40年近く行っている。木曾でも町民が議論し、こういう道には車を通さない、など話し合うことが必要である。
- 周辺の人に頼りになる街へ
- 都市の利便施設が歩ける範囲にあることが必要である。福島へ行けばそろうというようになる必要がある。
- スーパーマーケットでは顔と顔を見合わせて買うことがない。便利に楽しく出来る買物が大切である。
- 家族や友人との集まり、職場、法事、結婚式等様々な集まりの場となることが必要であり、集まりの場を集積させる必要がある。
- 来やすい街とするために、バスの重要度は高くなってくる。
- 街なか居住の推進
- 1．調査の進め
- 住んでもらうためにはどういう人が住み、どういう住まい方が望ましいのか、空地・空き家はどれくらいあるのかという実態の調査が必要である。
- 2．住宅誘導方策の構築と推進
- 今までは公共や民間が大きな住宅を建てるという時代であったが、金沢市で行っているように、中心市

街地に移り住む人に支援制度を行うことなどが必要である。空地に移り住む人にはさらに上乗せした建築費の補助など、見通しを立てやすい制度が必要である。大きなディベロッパーが建てるのではなく、個人が建てるのが大事である。

3．生活環境の整った街へ

- 子育てが出来るという視点が必要である。これまで都心は商業開発がメインであったが、駅に託児所を作る事例なども増えてきている。
- 防犯、防災の視点も重要である。
- 高齢者が楽しく暮らせるというのも大事である。
- 周辺の人が福島の発展に期待していると思うので、それに応えるまちづくりが必要である。

「観光と生活が融合した木曾町らしいまちづくり」(熊谷委員)

- 木曾町にはすばらしいまちが残っていると感じた。町長から中心市街地活性化は観光客を呼び込むことで進めてきたが効果がでていないと話があったが、方向としては間違っていない、ただし時間がかかるということをおきたい。

1．観光への眼差しが街の活力を高める

- 中心市街地は、街の財産集積、伝統的祭り等が継承され、生活に密着したものづくりが行われ、娯楽・レクリエーション施設が充実し、宿泊滞在施設等がある。

- それが高齢化や人口減少、郊外大型店の出店により、コミュニティが脆弱化し、ものづくりにかかる需要も減少してくるのが一般的な中心市街地である。
- これに観光の視点を加えると、継承するサポーターができ、ものづくりにかかる需要が拡大し、都市的センスが入ってきて販路も拡大する。
- 木曾町の資源性は全国的にも宝庫であるといえる。

2．様変わりしつつある観光旅行の形態

- 「じゃらん」で調査した観光旅行の形態をみると、旧来は温泉や露天風呂、名所、旧跡の観光が中心だったが、近年はおいしいものを食べる、まちあるき、都市散策が増加している。
- テーマパークよりまち散策を目的とした観光が増えている。ゆっくりと地域の生活文化を見て、地元と触れ合う形態に変化している。
- 注目される観光資源としては、名所旧跡、目を見張る自然、珍しい歴史文化財から、豊かな暮らしぶり、街並み、里並みが注目されてきており、美味しいものを食べたいというニーズが増えてきている。意見交換会の中でみやげ物が売れなくなったとの意見があったが、生活に密着する農産物や美味しいパン、自分で気に入って使う器などを観光客が買っていくようになった。

3．木曾福島の街なかの観光特性

- 木曾福島には、従来型観光に対応する資源もあるが、暮らしと一体となった資源もある。
- 暮らしを支えるユニークな街・建築があり、坂・路地、崖家建築がある。坂を売り物とする長崎や函館の港町とは違い、木曾福島はコンパクトにまとまってヨーロッパの街並を思わせる。
- 木曾漆器や木工等全国に知れ渡った工芸品がある。また、食文化もある。
- 街並環境整備事業の推進により、美しい景観が形成されている。

・広域的に見ても、周辺に色々な拠点があり、条件はそろっている。

4. 木曽福島における観光からの中心市街地活性化・地域づくり

・条件を活かして観光と絡めた中心市街地の活性化のあり方として、都市型観光の育成、広域連携拠点と連携した観光ゲートウェイ機能の充実、環境・高齢化等に配慮したコンパクトシティ化、観光地のイメージアップがある。

(1) 都市型観光産業の育成

1) ものづくり産業、宿泊産業、飲食業

・伝統的工芸を活かしたものづくり産業を育成してほしい。上の段に漆器の工房が出来ている。また味噌糀のお店も出来ている。金沢もものづくりで秀でているが、ものづくりの店がなくなってきている。木曽福島ではものづくりの店がいきいきと活躍してきている。こういう店を町民が残すように努力してほしい。角館でも地元商店街は空き店舗が多数あるが、商工会が業態を変えようという指導を行っており、地域でもものづくりを行う業態に変化してきている。木曽の2倍の商店があるが、10数件の業態がこれまで変わった。善光寺前の商店街でもコンバージョンによりパン工房ができています。都市型観光を育成してほしい。

2) 着地型旅行事業

・旅行業法の施行規則の改正により、地元で旅行商品を売り出せるようになった。観光協会やTMOでも旅行商品を売り出せる。地元駅からの送迎により、ものづくりのお店と観光産業を連携させて、地元の中で循環するようなきめ細かな観光商品を作ることが可能になった。飯山市ではこれを取り入れて、法人化し、ふるさとを活かした観光商品を売り出している。

(2) 観光ゲートウェイ機能の充実

・観光、交通の拠点に加えて情報の拠点の充実が必要である。長野県の小川村では第3セクターでおやきのアンテナショップを運営している。

・また公共交通のバスネットワークをつくりながら、2次交通の充実も必要である。

(3) 環境・高齢化等に配慮したコンパクトシティ化

1) 歩いて暮らせる＝楽しめるまちづくり

・歩いて暮らせるまちづくりはイコール楽しめるまちづくりである。最近の観光客は中高年が多く、健康志向である。まちなかの観光化をはかるには、車中心となっていることに問題がある。交通経路や駐車場の配置を考える必要がある。

・また地元、まちの中に観光客が入っていただく意義を考えてもらう。小さなことから始めていく。千葉県の佐原市は伝統的建造物群保存地区で売っており、まちなかに車が入ってくるが、観光客を優先し、観光客にはクラクションを鳴らさないことを徹底しており、観光地のイメージアップを図っている。

2) 空家・廃校等を活かした交流・滞在施設提供

・鶴岡市では古民家を活用し、中長期の滞在客に提供している。周辺に住んでいる方がそれら滞在客をサポートしている。

・観光の魅力は、「ここだけ」、地域独自のもの、「今だけ」、旬の魅力を大切に、「あなただけ」、観光客一人ひとりに良質な商品を提供し特別な体験をさせるこ

と、が基本であり、それがリピーター獲得の秘訣である。

第二部

パネルディスカッション

(みずほ情報総研 金澤)

・今日は多くの町民の方に集まっていたいて、うれしく、また驚きもある。住民の方に中心市街地に関心を持っている方が多い証拠である。

パネラー自己紹介

(みずほ情報総研 金澤)

・平成13年に中心市街地活性化計画の構想を立てられたとのことだが、その際の危機感や経緯について教えてほしい。外部から見れば、良くここまで集中的な投資が出来たと感心してしまう。

(田中氏)

・平成10年に町長になり、一番の課題はまちなかに元気がないことであった。衰退していく中で、元気のある町にしたいというのが町民の気持ちであった。

・町民の皆さんで総合計画を作ろうと呼びかけた。国土庁からアドバイザーが3人来て、タウンウォッチングをし、まちの良いところ、直すところを議論した。96人が参加し、木曽が前向きなのはこの96人が起爆剤になったからである。2年間で総合計画作成し、3年目に中心市街地活性化基本計画を策定した。その後、総合計画、中心市街地活性化基本計画に基づいて事業を進めてきた。街づくり会社の背景に100人のボランティアがあり、この背景がだんだん出来ていった。もっと大きな運動になっていく必要がある。

(みずほ情報総研 金澤)

・実働部隊ということでまちづくり会社が重要な役割を担ってきた。その代表より現在の活動、問題について話題提供してほしい。

(重野氏)

・まちづくり会社は平成14年に資金を集め、平成15年6月27日に3500万円という大金を町民から集め、行政から4000万を借りて、設立した。代官屋敷、関所、駐車場、蔵、松島亭、肥田亭の運営にボランティアと共に努力し、皆さんから預かった資金をお返しできるようがんばっている。

・キャンプ場のスタッフは40名ほど居り、どうしたら維持できるか、3年赤字であつたらやめてよという中で、3年を目処にがんばってきて、驚くほど努力し、生まれ変わった。ボランティアのスタッフの努力のかがあった。

・松島、肥田亭の上の段のにぎわいは、ボランティアスタッフの日夜の検討話し合いでできあがっている。

・このまちをきれいにしようということで、道路に花を植え、老人クラブ、婦人部の皆さんで努力している。

・これからやることは皆さんがスタッフに入っていたいて、皆さんと共に汗を流していただけたらうれしい。どうか皆さんと共に頑張っていたきたい。

(みずほ情報総研 金澤)

・熱心なボランティアの支えがあつてまちづくりができています。午前中に、まちなみウォッチングに参加

された方も会場に来ていただいていると聞いている。地域協議会での取組みについて話をしてほしい。

(樋口氏)

- ・地域協議会として平成 18 年 4 月 1 日に発足し、まちづくり条例に基づいて、行政と住民が協働して進めている。住民の参加が責務となっている。
- ・現在住民参加型まちづくりが求められており、地域協議会としては大勢の人に参加していただきたい。
- ・平成 18 年にまちづくり計画を作成し、4 地区でできた。暮らし作り部会では自主防災組織を目指して各ブロックで安心して暮らせるようお助けマップを作りたいと始めている。花いっぱい運動も進めており、協議会を立ち上げ、資金面でバックアップしたい。
- ・中心市街地の中に 8 対区景観形成住民協定の地区があるが、中心市街地内の全部の地区で景観形成住民協定が出来ればよいと考えている。
- ・ヤゴラでは、ワークショップの中で各主体が色々な意見をだして、蔵を活かして、ミニ美術館を持ってきて、住民が集まれる場所にしたいとしている。
- ・総合計画、中心市街地活性化基本計画、歩道橋の寄付など、多くの住民が参加してきているが、今後も大勢の皆さんに参加してほしい。

(みずほ情報総研 金澤)

- ・多くのまちづくりの取組みがなされている。商工会として、商売している中でまちなかがどういう状態なのかデータを交えて話をしてほしい。

(春日氏)

- ・街の中に元気がないということから中心市街地活性化の取組みを行い、成功しつつある。元気のあるまちを視察した。権兵衛トンネルが開通して 2 年経つが、元々は伊那の客があふれるほど着ていたが、減少した。厳しい状況で心配している。
- ・空き店舗が多くなり、中心市街地の流れが西のほうに移ってきたことから、中心市街地の空き店舗が増加している。商工会の会員は平成 11 年は 413 店舗であったのが平成 18 年には 356 店舗と 14.1%減少している。ギフトきそふくしま協同組合は、平成 11 年は 121 店舗であったのが、平成 18 年には 83 店舗と 31.4%減少している。空き店舗は 5 商店街で 225 店舗中 35 店舗となっており、そのうち上町本町に 26 店舗と 75%が集中している。この 26 店舗には店舗併用住宅も含まれる。
- ・商工会の新しい事業を行うが、蕎麦のほかに食べ物が少ないため、新しい食材開発をし、新年会で 6 食を紹介している。
- ・今後、食材開発のトップリーダーをその気にさせる努力をしたい。新しい人の流れを作る努力をしている。

(みずほ情報総研 金澤)

- ・現行中心市街地活性化基本計画の経緯、ボランティアの協力、安心・安全の街づくりなど協議会の話や、数字的には厳しいという話を中心市街地で活動されている当事者の方からもらったが、景観の整備、イベントなど、これらをどう評価し、課題と感じているか。他の方で意見はあるか。

(天谷氏)

- ・上の段はきれいになってよいが、歩道橋や親水公園など評価のしようの無いところもある。歩道橋は何のためにあるのか。将来的に対岸のまちなみが見え

るようにあるのか。最終的にまちがどうなるのか完成予想図を示してもらいたい。

(田中氏)

- ・中心市街地活性化基本計画は、10 年計画で、短期、中期、長期の 3 つに分けて現在は 5 年目である。真ん中に来て、今までのまとめをしていく時期である。中心市街地活性化法そのものも改正され、新たな視点で総括し、方向をだしていきたい。歩道橋は中心市街地活性化基本計画にはなく、各区からの要望により、今どうしても必要な橋ではないが、寄付があるなら作るということで整備したものである。歩道橋ができてまちの新しいイメージが生まれている。良い資源になっていくのではない。

(木曾町古畑氏)

- ・中心市街地活性化基本計画は、まちなかに住んでいる人に入ってもらい立てた計画である。10 年後にどうなるかは謳われていない。イメージ図は無いが、計画策定時に各戸配布し、イメージとなる絵も入っていた。それも踏まえて整備を行ってきた。

(みずほ情報総研 金澤)

- ・木曾町は外から人を呼び込むことで期待があるが、消費者の立場でよいところ、悪いところは何か。

(中邑氏)

- ・合併をしたが、木曾町としての民生児童委員協議会は合併前と変わらない活動をしている。一人暮らしの高齢者宅に 1 月に 1 ~ 2 回訪問し、安否確認を行っている。その他、一人暮らしの高齢者の年一回のお楽しみ食事会の手伝いをしてきたが、その活動はまちづくり協議会の元気作りに移行している。社会福祉協議会で週一回宅配弁当をボランティアで行っている。
- ・高齢化が進む中で、一人で住み、近いところに子供などがいない人で、デイサービスを利用しない人向けに、サロンの立ち上げを薦めている。空き店舗が目立ってきているので、そういう場所を利用して出来ればよいと考えている。
- ・消費者としては、公共の建物が西に偏り、町外れの人はお店が閉まっていく。歩いて買物にいけたら助かるのという声を聞く。高齢者がここで暮らしてよかった、若い人がここなら暮らしていける、というまちになることを望む。
- ・子供の食育で大切にしてきたことを孫たちに伝えていく、安心安全な生活が出来たらよい。ガソリンも高くなり、町内でどんなことも間に合う暮らしができればよい。自分たちのまちで消費ができればよい。

(みずほ情報総研 金澤)

- ・天谷先生は、横浜から木曾に移り住んできて、職場もあるだろうが、このまちが好きだから住み続けているのだと思う。木曾への期待や思いは何か。

(天谷氏)

- ・病院が地域を活性化させていくことはないと思う。来街目的で病院の比率が高いのは、あってはならないこと。他の目的の比率が低いから病院の比率が高くなっている。町に活性がないためといえる。
- ・病院が衰退すればまちも衰退する。5 つの県立病院の中で木曾病院が一番成績が良いが、この先は厳しい。人口減少で老人比率が高くなっているが、老人の人口も減少していく。患者数も減少し、医師確保の問題もある。数年であちこちの科の閉鎖もあり得

る。

- ・木曾に学生のとき始めてきたときは住みたくないという印象であった。木曾はノスタルジィを感じるが、来てみると美しい町ではなく、住んでみて初めて味が出る。観光客には感じられない。
- ・まちの整備はやってもらいたいが、全体像が見えないとポツンポツンとやっけていてもわからない。わからないと協力できない。まちなみ全体をきれいにしてお客が来れば、活性化するというとそうでもない。発想を転換し、整備より周辺をきれいにすることが必要。御嶽山を活用しない手はない。客を呼び込む目玉を作らないといけない。御嶽山と蕎麦畑は魅力的である。花畑を作る、桜の木を一面に植えるなど。観光客がくれば自然にまちの将来像も見えてくる。

(司波委員)

- ・大事なポイントは、小さな町でまちづくり会社の資本金や橋に寄付が集まったということである。10万本でもこれだけの寄付金が集まらない。郷土への帰属意識が強いといえる。町民と共に、という可能性が強い。すごいエネルギーを次の世代も持っていける仕組みを作れたらよい。
- ・中心市街地の活性化は日本では遅れている。ドイツでは30年40年前、アメリカでも20年前に始めている。10年弱というのは先進国では遅い。法律を作った意義は、中心市街地を分かってもらう爆弾にはなった。木曾町では観光に目をつけ、それなりの成功をみている。第2弾は、何のためにどうやるのか見せる必要がある。周辺の人为中心市街地にお金を使うのに理解されない。周辺の人賛成する全体像を作るのと、プロセスを作る必要がある。生活の拠点として中心市街地が大事ということを示す必要がある。

(熊谷委員)

- ・街並環境整備事業や橋の整備は、まちの方の意欲があるうちに前倒してやってきたと聞いており、これらがずっと力強い資源になるわけではなく、まちの方が生き生きし、その暮らしが資源になっていく。
- ・権兵衛トンネルの開通で伊那の客が減少した。一年目は開業効果があるが、二年目は減少した。新幹線が停まるようになると温泉地はだめになるという。トンネルが抜けてアクセスが良くなったのはチャンス。一方、ちゃんとまちづくりをやっていかないといけない。
- ・外部資本として職人の技をひっぱってきてても良い。上田では東京のパン屋をひっぱってきた。若い人を含めて、門戸を広げてみたらよい。
- ・100人くらいのボランティアの献身的な活動はあるが、将来的にどうなるかわからない。当初3,4年は活発でも効果が見えないと不協和音がでてくる。

(重野氏)

- ・ボランティアはある程度のトラブルはあるが、良くなってくと自然と消えている。ただ、頼りすぎてもだめである。ボランティアで蓄えた事業の中で、少しずつ進んでいるのが現状。

(田中氏)

- ・全国の色々なまちづくりを見て歩いてきたが、きれいなまちなみは、行政が整備してもきれいでない。

生活感がない、人の心がないまちはきれいでない。町民がきれいな町を作ろうと前向きになっているのがきれいな町であろう。そういうボランティアやまちをつくらうという町民をどれだけたくさん増やせるのかが、この町がどうなるかの鍵を握っている。加速度的に進まないと、途中でダウンしてしまう。木曾には食が欠けている。木曾特有の食を磨かないといけない。本当に成功したことにはならない。ものづくりは、まちも努力をしている。木工の家具の懇談会を開いたりしている。パンや、靴屋など、昔あった産業は安いものに惹かれて従来の職人が失われてきたが、掘り起こして育てていくことが大事。そうすればリピーターも集まるのではない。

(樋口氏)

- ・町全体が西に動いている中で、木曾町の職員も人口に応じて削減ということになってくるかもしれない。そのとき、支所廃止となればますます衰退してしまう。今後そういうことになるならば、本庁を支所のところにもってきてほしい。

会場参加者との質疑応答

(参加者)

- ・他にはない新しい木曾町にしていきたい。発想をかえて、木曾町独特のものを作っていく必要がある。例えばマリOTTゴルフ場を整備するなどがある。

(参加者)

- ・ドイツのデュッセルドルフに行った際に、木曾は屋根の赤いかわいいまちといわれたことがある。整ったまちだと思う。
- ・官庁が減ったが、今も残っている。こういうものに言及しないのはおかしい。ここにくる人を大事にする必要がある。
- ・歩くまちとポスターはあるが、ちっとも歩けない。だから寂れる。下駄を履いて、浴衣を着て歩ける町にする。意外と知られていない観光資源もあり、発掘していく必要がある。
- ・あたたかい心売ればよい。
- ・文化施設は身の丈にあった文化施設を作る必要がある。
- ・まちづくり行方小さい団体をほめて称える必要がある。
- ・まちづくりは難しいからこそやりがいがある。

(参加者)

- ・将来のまちのイメージを目に見える形でしてほしい。町民がイメージできるようにしてほしい。20~30年で人口が減少し、地方の町村では40~60%減ると考えられる。若者がいなくなり、限界集落になっていく。山の上から降りてきて、限界集落は閉じていくという計画になっていく。人口増から転換できないでいる。
- ・まちなかの空洞化、高齢者増の中で、互いに助け合って町会レベルで生きていかないといけない。手づくりの小さな店や高齢者向けの店をまちづくり会社が行う等、コミュニティビジネスが必要である。

(参加者)

- ・自分は関西から開田高原に移り住んだ。御嶽山が別荘地から見えなくなってきた。自力で木を切るとお金がかなりかかる。まちをあげて御嶽山が見える環境づくりができればよい。別荘地には650軒の家が

あり、550 軒が別荘である。別荘に住む人は春～秋に住み、木曽福島で食糧を調達する。別荘に来る人と交流していくことも大切である。

- ・花いっぱい運動を行っているが、マリーゴールドや外来の花などではなく、山野草や勿忘草など、木曽だけの山野草に目をやってほしい。

(天谷氏)

- ・まちの施設が西に移動するのは問題ではなくチャンスである。役場は駐車場が必要になり、景観の妨げになる。大きな建物がなくなれば、空地になり再開発の可能性もある。
- ・景観を整備するときに、地元だけではなく外部の人を入れてほしい。
- ・木曽福島の町役場は町の身の丈にあった庁舎となっている。庁舎などにお金をかけるのならばまちの整備にお金をかけてほしい。

(みずほ情報総研 金澤)

- ・人口減少は避けられないが、周辺の人、移住してきた人も合わせてボランティア、まちづくりの担い手は増えてくるのだろう。シンポジウムの参加者に、またケーブルテレビの放送を見ている周辺住民の方々に、皆さんで木曽のまちを良くしていこうという気持ちを持っていただければ幸いである。取組む上では、「木曽らしさ」が大きなキーワードになると思う。

以上

4. 報告会資料

長野県木曽町
報告会

経済産業省 平成19年度中心市街地活性化支援業務
市町村の中心市街地活性化の取組に対する
診断・助言事業

平成20年2月16日

1

診断・助言事業の目的

平成18年8月22日に施行された改正中心市街地活性化法に基づき中心市街地活性化に取り組む市町村に対し、新しい中心市街地活性化基本計画における基本的な考え方や事業を実施する地元での推進体制の在り方等について、実態を踏まえた幅広い視点から診断・助言を行い、市町村自らが中心市街地活性化の今後の取組施策を作成、中心市街地活性化を具体的に推進していく一助とする。

事業の対象市町村

平成19年度または平成20年度に、中心市街地活性化基本計画の策定、国による認定を目指す市町村。
公募により、今年度は全国20市町村を選定。

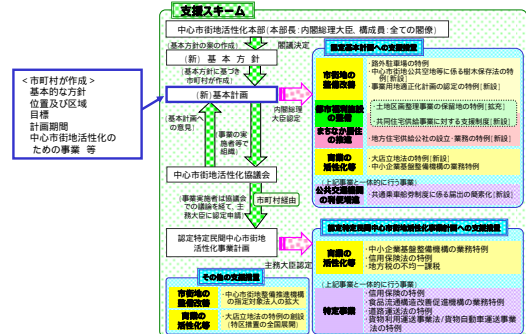
2

事業の内容

- (1) 選定市町村の中心市街地の現況把握
 - ・統計等の客観的データに基づき、中心市街地の現況の整理
 - ・アンケート調査の実施(中心市街地来街者アンケート、郊外大型店来店者アンケート)
- (2) 会合開催を通じた診断と助言
 - ・地元ニーズに応じて、意見交換会、ワークショップの開催、庁内検討組織の支援
 - ・担当の診断・助言委員(2~3名)と、地元の行政、民間関係者との意見交換
- (3) 報告会の開催
 - ・中心市街地の関係者や市民等を招致し、報告会を開催

3

中心市街地活性化のスキーム



4

これからの中心市街地活性化

新旧計画での施策

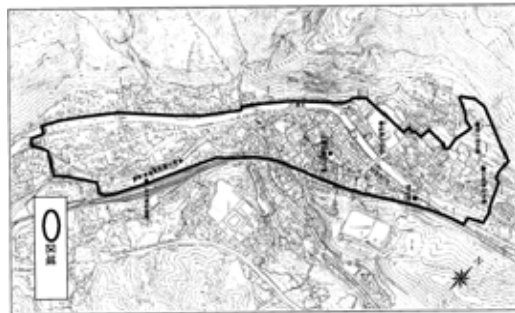
- 【旧計画での施策】市街地の整備改善、商業の活性化
- 【新計画で加えられた施策】都市福利施設の集積、まちなか居住の推進

街づくりにおける背景

人口減少、高齢社会に向けた都市構造
財政制約時代の集中投資
なお、認定中活基本計画以外の支援措置との組み合わせで検討
まちなかの“生活拠点”の活性化・再生
・まちなかは長い歴史に培われてきた地域のアイデンティティ、拠り所
・まちなかは多様な関係者の活動が凝縮され、交流する場

5

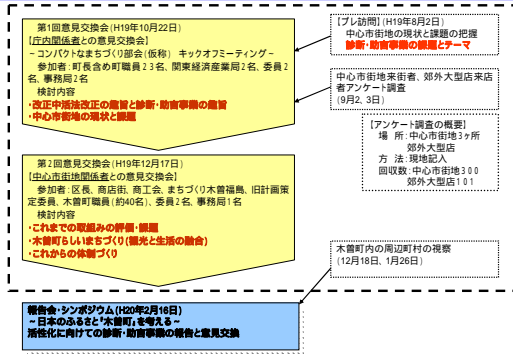
旧計画で設定した中心市街地の区域



(注)黒線の区域が「本宮福島町中心市街地活性化基本計画(平成14年4月策定)における中心市街地の区域

6

木曾町診断・助言事業の実施経過



7

中心市街地の現状(まちなかでの雇用)

中心市街地の事業所数は、3年間で63件・10.3%減。
中心市街地の従業員も、1024人・22.1%減。

全町に対する事業所数シェアは、55.5%と高い。

中心市街地の事業所数等の推移

項目	単位	中心市街地エリア内		市町村全体	
		H16年	H13年	H16年	H13年
事業所数	件	548	611	987	1,131
(前期比増減率)	%	10.3	10.8	12.7	6.8
事業所シェア(対市全体)	%	55.5	54.0		
(前期比増減)	%ポイント	1.5	2.5		
従業員数	人	3,609	4,633	5,874	7,656
(前期比増減率)	%	22.1	12.6	23.3	8.3

(資料)事業所企業統計

11

診断・助言事業のテーマ

活性化に向けての取組状況

- ・旧法に基づく中心市街地活性化基本計画を木曾福祉町で策定
- ・改正中活法に基づく中心市街地活性化基本計画を平成21年度中以降に策定予定

課題認識

- ・観光と町民の生活が融合した中心市街地の実現
- ・中心市街地活性化の意義について多くの町民の理解の増進(特に旧周辺村民)
- ・多様な交通規制、公共交通の充実による、歩いて楽しい街の実現
- ・中心市街地活性化についての庁内の理解促進と、全庁体制の確立

【テーマ】

観光と生活が融合したコンパクトなまちづくりの推進

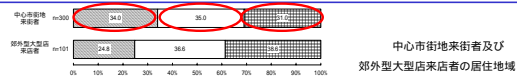
全庁的体制で取組むための体制整備のための助言

協議会へ参加が想定されるメンバーを中心に、これまでの取組みを総括する中心市街地活性化の意義、必要性について、特に旧3村民を中心に理解を深めるよう対応する

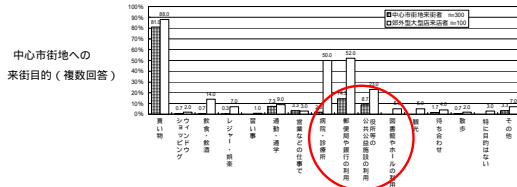
8

中心市街地の来街者の特徴(居住地、来街目的)

来街者の居住地は、市街地内、市街地外、他の市町村が1:1:1で同じ割合。



来街目的は、買い物が多いが、病院、金融機関、公共施設も多い。



12

中心市街地の現状(人口・世帯)

中心市街地の人口は、木曾町全体よりも減少が激しい。5年で10%減。

高齢化率は34.5%で、3人に1人以上が高齢者(木曾町全体より高齢化が進展)

中心市街地の人口の推移

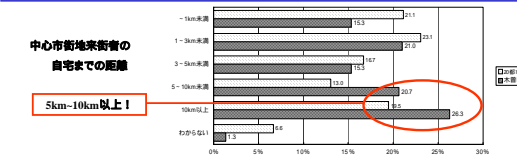
項目	単位	中心市街地エリア内		市町村全体	
		H19	H16	H17	H12
人口	人	1,615	1,804	13,883	14,866
(前期比人口増減率)	%	10.5	7.9	6.6	不明
人口シェア(対町全体)	%	11.6	12.1		
(前期比増減ポイント)	%ポイント	0.5	不明		
人口密度	人/km	3,296.0	3,681.6	29.1	32.2
世帯数	世帯	681	693	5,329	5,500
世帯あたり人員数	人世帯	2.4	2.6	2.6	2.7
老年人口の構成比(65歳-)	%	34.5	33.0	31.5	不明

(資料)国勢調査、住民基本台帳資料

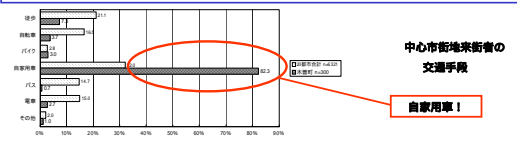
9

中心市街地の来街者の特徴(自宅までの距離、交通機関)

20都市平均と比べると、木曾町中心市街地には、遠方からの来街者が多い。



来街交通手段は自家用車が断トツ。徒歩、自転車、公共交通機関利用は少ない。



13

中心市街地の現状(賑わいを演出する商業)

小売年間販売額は、2年間で14億円の減少。5年間で72億円・32%減。
小売販売店数は、5年間で38店舗・20%減。
空き店舗率も21件、14%。

全町に対する販売額シェアは、78.8%と高い。

中心市街地の商業の推移

項目	単位	中心市街地エリア内		市町村全体	
		H16	H14	H16	H14
小売年間販売額	億円	115	129	146	176
(前期比増減率)	%	10.9	32.9	17.0	27.6
販売額シェア(対市全体)	%	78.8	73.3		
(前期比増減)	%ポイント	5.5	3.7		
小売販売店数	店	148	146	233	227
(前期比増減率)	%	1.4	21.5	2.6	19.8
空き店舗数	店	21	26	不明	不明
空き店舗率	%	14.2	17.8	不明	不明

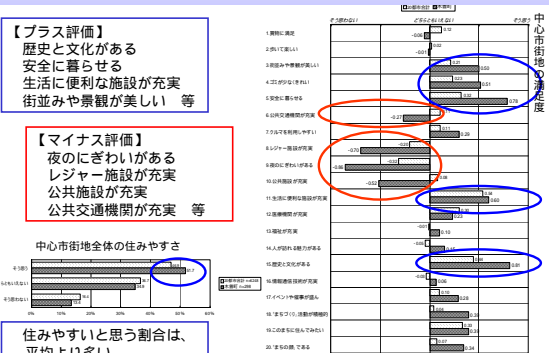
(資料)商業統計等

10

中心市街地の満足度・住みやすさ

【プラス評価】
歴史と文化がある
安全に暮らせる
生活に便利な施設が充実
街並みや景観が美しい 等

【マイナス評価】
夜のにぎわいがある
レジャー施設が充実
公共施設が充実
公共交通機関が充実 等



住みやすいと思う割合は、平均より多い。

14

意見交換会のポイント

【第1回意見交換会（10/22）】～庁内関係者～

「コンパクトなまちづくり」は、単に周辺の集落から、中心市街地に人を住まわせるというだけでなく、周辺の手当ても含めて町として検討すべき課題である。また、周辺の集落もコンパクトな土地利用により環境を守ることが必要となる。

中心市街地の基本計画は総合計画と併せて魅力ある木曾町全体を作っていくという視点で検討する。

街なかと地域の産業との連携を見直すことで、街なかを核として、町全体の複合的な産業・文化となり、活性化に繋がるような取組みが必要である。

街並みの整備により観光客が増えているが、観光地として俗化することなく、木曾町のよさを見直し育てることが、本物の観光であり、地域への誇りにも繋がる。

協議会準備会には中心部の商業関係者だけではなく、周辺の意見が反映されるような仕組みを検討する。

15

意見交換会のポイント

【第2回意見交換会（12/17）】～中心市街地関係者～

地形の制約があるので郊外型の大型店が出店しなかった。まちの高齢化、人口減少がそのまま商業に響いている。逆に言えば、若い人が住んでくれば、持ち直す可能性がある。

現状はまちなかで生活が困らないようになっている。これが最後の機会だと思って手当てをすべき。また、広い商圏を持っているということもポイント。

観光施設だけではなく、周辺の路地や川沿いまでも観光の対象となっており、まち歩きできるようになっている。周りに観光資源があり、まちで接点がないか。

これからは周辺部の方の支持がなければ財政面も含めて支持されない。「福島が良くなることで、周辺のためにもなる」ことを理解してもらおう。

道路が狭いからといって道を広げれば、まちが壊れる。車はまとめてどこかに置いてもらうしかない。歩いてもらうまちづくりを進める必要がある。

16

木曾町中心市街地活性化 の考え方

2008年2月16日

司波 寛

わが国で、今何が起っているか

1. 人口減少が進む
 - ・放置すればただちに人が住む地域ができる
2. 高齢化が進む
 - ・緊密な助け合い社会が必要
3. 省エネ社会に向けて進む
 - ・生活交通を自動車だけに頼れない社会環境へ
4. 経済が生活感覚に占める割合の減少
 - ・生活の質の向上を求める時代へ

木曾町・今まではどうなっていたか

1. 福島が核の役割を担ってきた
 - ・木曾町全域から見て生活の中心
 - ・買物、医療、生活利便施設、娯楽施設、等が集積
 - ・働く場、教育施設も集積
 - ・放射状の道路も十分に整備済み
 - ・本数は少ないが周辺地域と福島を結ぶバス運行も
2. 周辺には特色あるある地域が
 - ・御岳信仰と結びついている三岳
 - ・先駆的な農業の展開と新しいリゾート地開田
 - ・街場との近さを活かした新たな居住地となる日義

木曾町・今どうなっているか

1. 福島は
 - ・高齢化の進展と人口減少 空家、空室、空地の増加
 - ・町域外への買い物物流出 商店街の衰退
 - ・木工業の衰退による働く場の減少
 - ・街並再生等による観光客誘致 不十分だが地場産業へ
2. 周辺地域は
 - ・高齢化の進展による地域を支える力の衰退
 - ・流入する都市住民を地域力へつなく - 不十分
 - ・生活の基本を支える福島との密接な関係

福島をどうい街にするか

1. 福島に住む人だけでなく、周辺の人にも頼りになる街へ
2. にぎわいの大本、街なか居住の推進
3. 新たな地場産業として都市観光振興
4. 周辺部との連携強化
5. 歩いて楽しい街へ

周辺の人に頼りになる街へ

1. 都市の便利施設の集中
 - ・行政、金融、通信、交流等の核になる施設
2. 便利に楽しくできる買物
 - ・フェース・トゥ・フェースの買物 一番難しい
3. 様々な集まりの場
 - ・家族や友人との集まり、職場の集まり、法事、結婚式等
4. 娯楽・文化を享受できる場
 - ・飲食の場、ホール、催し
5. 来やすい街へ
 - ・バスの重要度は高くなる

街なか居住の推進

1. 調査のすすめ
 - ・どういう人が住むのか
 - ・どういう住まい方が望ましいか
 - ・福島の空家、空地の調査
2. 住宅誘導方策の構築と推進
 - ・公が住宅を建てる時代ではない
 - ・民が住宅を建てるのを公が支援
 - ・大型事業ではなく、個人でもできる小さな事業を支援
 - ・街並み形成に寄与する住宅を支援
3. 生活環境の整った街へ
 - ・子育ての視点
 - ・安全・安心の視点
 - ・高齢者の視点

では、この後のパネルディスカッションで
皆様からのご意見を期待しています

観光と生活が融合した 木曾町らしいまちづくり

平成20年2月16日

市町村の中心市街地の取組に対する診断・助言事業報告

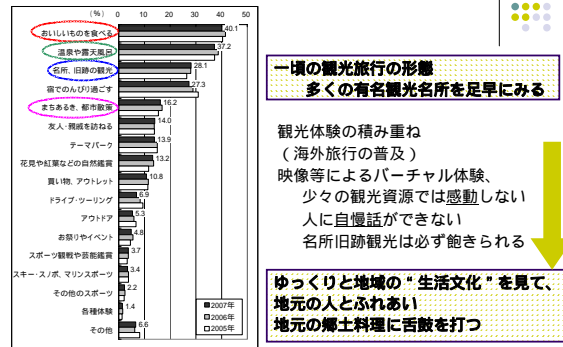
報告者：熊谷圭介



1. 観光への眼差しが街の活力を高める



2. 様変わりしつつある観光旅行の形態



ちょっと昔の観光資源

これからの観光資源

- ・名所旧跡
- ・目を見張る自然
- ・珍しい
歴史文化財

- 豊かな暮らしぶり
- ・街並み
- ・里並み
- 暮らしの中に息づく
生活の知恵や技術
- ・食
- ・ものづくり産業

例えばお土産も・・・

- ・珍しい置物
- ・珍しいお菓子

- ・新鮮な農産物
- ・美味しいパン
- ・自分で気に入って使う器

3. 木曾町の街なかの観光特性

着実に進められた街づくり

- 中山道の宿場町に因む歴史文化財
- 天下の名川木曾川

+

暮らしを支えるユニークな街・建築
立体的な街の構造、坂・路地
産家建築
センスのある日常を支える工芸
木工、木曾漆器・……
地産地消の食文化
蕎麦、酒、菓子、イタリアンレストラン

これらが街並環境整備事業等できちんと整備

広域的な位置づけ 開田高原、日義、三岳等の拠点
上高地・乗鞍、木曾駒高原等との連携

(2) 観光ゲートウェイ機能の充実

1) 情報拠点・アンテナショップ機能



2) 観光2次交通のより一層の整備

4. 木曾町における観光からの中心市街地活性化・地域づくり

(1) 都市型観光産業の育成

- 1) ものづくり産業、宿泊産業、飲食業
- 2) 着地型旅行事業(付加価値を付けて地域を売る)

(2) 観光ゲートウェイ機能の充実

- 1) 情報拠点・アンテナショップ機能の拡充
- 2) 観光2次交通のよりいっそうの整備

(3) 環境・高齢化等に配慮したコンパクトシティ化

- 1) 歩いて暮らせる = 楽しめるまちづくり
- 2) 空家・廃校等を活かした交流・滞在施設整備

地域住民の豊かな暮らし

周辺田園部を含めた広域の中心としての街の役割

(3) 環境・高齢化等に配慮したコンパクトシティ化

1) 歩いて暮らせる = 楽しめるまちづくり

- 安心して、歩いて暮らせるまちづくり
木曾町ならではの生活文化を“歩いて”じっくり体験し、地域の人々と交流できる観光



- 交通、リサイクル、健全な林業育成等環境に配慮したまちづくり
観光地としてのイメージアップ



(1) 都市型観光産業の育成

1) ものづくり産業、宿泊産業、飲食業



木曾のもつ地域ブランドをもっと育て、活かして、観光客が買い物をする、食事をする“ヨーロッパ型”街へ

(3) 環境・高齢化等に配慮したコンパクトシティ化

2) 空家・廃校等を活かした交流・滞在施設提供



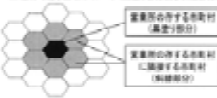
(1) 都市型観光産業の育成

2) 着地型旅行事業 (付加価値をつけて地域を売る)

改正の概要

○ 次の条件の下、事業型企画旅行を営めることができるよう、旅行業法施行規則を改正
○ 旅行の開催区域が、旅行客に、一泊営業所の存する市町村、これに隣接する市町村及び国土交通大臣の定める区域*の区域内に設置されていること
○ 旅行代金(一定の比率以内で現金による申込みを除く。)の5%までは、旅行開始日より前の変更は行わないこと

※ 旅行可能な区域のイメージ(黒塗り部分及び斜線部分)



消費者保護を図りつつ、地域の観光資源を熟知した地元の中観光事業者による旅行商品の創出を促進。

業種別	業種別				正引営業所	
	企業型	個人型	手配旅行	専業型	兼業型	
旅行業	○	○	○	○	○	2000万円 3000万円
観光業	×	○	○	○	○	1100万円 700万円
観光業	×	○	○	○	○	300万円 300万円

観光の魅力の基本は

ここだけ・いまだけ・あなただけ

それがリピーター獲得の秘訣